

Title	ヴィクトリア朝前期の書物生産におけるMedievalism : Henry Shaw, Owen Jones, Henry Noel Humphreysを中心にして
Sub Title	Medievalism in Victorian Book Production : With Special Reference to Henry Shaw, Owen Jones and Henry Noel Humphreys
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.188(201)- 201(188)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0201">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0201</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ヴィクトリア朝前期の書物生産 における Medievalism

—Henry Shaw, Owen Jones, Henry Noel  
Humphreys を中心にして—

高 宮 利 行

18世紀、19世紀イギリスの Medievalism に関する研究が盛んになった今日、この術語の定義や分類も重視されるようになった。1989年12月に開催された日本中世英語英文学会のシンポジウムでは、明治学院大学のマイケル・ウォトスン教授が、ドイツにおける4種類の分類を紹介したし、筆者自身も Medievalism を理解する手だてとして、中世主義、中世趣味、中世研究の3つに分類する提案をおこなった。この3分類については既に『三田文学』にエッセイの形で発表したもので、ここでは簡単に要約するにとどめる。まず中世主義とは、中世社会を構成する封建主義、家父長制度、階級秩序、教会制度、手工業などの長所を認め、これらを人間社会の理想として、できうるならば、このような社会を復活させたいと願う姿勢をいう。スコット、カーライル、ラスキン、モリスらの中世を理想とする態度がこれである。次に中世趣味とは、18世紀半ばから「ゴシック・リバイバル」の建築、美術、文学の分野で生まれてきたもので、城や教会の建築、装飾の効果や雰囲気として中世的な要素を視覚的に取り入れる動きのことである。これは20世紀に入っても実例がみられる。最後に、中世研究とは18世紀初めの中世文学や歴史に対する積極的な好古趣味 antiquarianism に端を発したもので、後には本文校訂、編集や研究書の形で、中世文学の姿を再現していった。これら3つに分類した各要素は決して相対立するものではなく、むしろ相互補完的に作用したことは注目に値しよう。

19世紀イギリスの Medievalism が、産業資本主義の発展がもたらした  
(188)

工業化と都市化の急激な変化に抵抗して生まれてきたことはよく知られている。しかし皮肉なことに、技術革新による印刷技術の向上が中世研究を促進し、中世趣味を一般に普及させる結果をも生み出していった。本稿では、この世紀半ばの書物生産と中世趣味、中世研究との関連について考察しようとするものである。

15世紀に発明されて以来、活版印刷術を用いたヨーロッパの書物生産は、19世紀に至るまでさしたる変化を蒙ることなく続いてきた。しかし、産業革命が印刷技術の改良に与えた衝撃は決して小さくなかった。例えば蒸気機関を利用した輪転印刷機の導入により、新聞は短時間に飛躍的に多くの部数を印刷することが可能となった。これはドイツ人の発明家フリードリッヒ・ケーニッヒが、ロンドンの有名な印刷会社ペンズリーで完成した輪転印刷機で、1814年に『タイムズ紙』が採用したものである。またアメリカの自然学者オーデュボンが1826年にエディンバラとロンドンを訪れて、当時世界最大の書物だった『アメリカの鳥類』を印刷したが、これも印刷技術の革新の賜物であった。

また製本の方式にも変化が生まれた。18世紀末までは、単行書の出版に当たっては、印刷済みのシートを書店で購入した顧客が、自分の好みに合わせて革で装丁してもらうのが常識で、書店でみられるのは、見本としての豪華な製本か、現在フランス綴じと呼ばれている仮綴じの粗末な製本かの、いずれかであった。ところが、蒸気機関を利用した製本プレス機の登場によって、短時間に安価なクロス装での製本が可能になったのである。Publisher's binding と呼ばれる製本がこれである。その結果 publisher's binding の装丁デザインという新たな職業分野が生まれた。後にダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのような画家たちが、装丁デザインにも手を染めたことはよく知られている。

また、技術革新によって挿絵入り本が比較的安価に製作されるようになったのもこのころである。必然的に子供用の絵本といったものが一般化したのも19世紀になってからの現象といえよう。ここで注目したいのは、周知のように、中世ヨーロッパで製作された写本、とりわけ聖書や文学作品

の写本は基本的に絵本であったという事実である。詩篇、祈禱書の類いや、『散文のランスロ』、『デカメロン』、『バラ物語』にみられるような、美しい色彩で彩られた装飾写本 illuminated MSS は、中世美術の重要な領域であった。しかしながら、印刷時代になると、用いられたインクの色は黒のほかにはせいぜい青と赤で、その後長い間印刷本に木版の挿絵はあっても、白黒の世界でしかなかった。色付きの挿絵はあっても、手による彩色だったのである。

カラー印刷が現れたのは18世紀初めであった。1704年に出版されたニュートンの『光学論』*Opticks* の中で、黄、赤、青の3原色の組み合わせによって総ての色を表現することが可能であるという理論が発表され、その結果ジャコブ・クリストフ・ル・ブロンを初めとする人々、主に印刷業者によって様々な実験が繰り返されていった。そしてジャック＝ファビアン・ゴーチエ・ダゴーチによってメゾティントという方式が発明され、本格的なカラー印刷が始まったのである。メゾティントとは、ニュートンの理論を用いて、黄、赤、青、黒のそれぞれのプレートを4回重ねて印刷する方式で、その名のとおり版画では不可能だった微妙な陰影を得ることができた。ゴーチエ・ダゴーチは人体解剖図をこの方法で印刷出版して、技術的にも最高の出来ばえを示した。

しかし、この方法を実践するには多額の経費と優れた技術を必要としたため、一般書にまで用いられることはなかった。19世紀になると、白黒図版では本文と同時に印刷することのできる木口木版 wood engraving、カラー図版では多色石版刷 chromolithography の技術が生まれて、比較的安価に挿絵入りの書物が生み出されるようになった。もちろんこの傾向に拍車をかけたのが、人口の増加と教育の普及によって識字率が上がり、読者層が飛躍的に増大し、書物に対する需要が拡大していくという社会背景である。新たに台頭してきた一般市民階級の読者層への書物の供給という形で、書物生産は質、量ともに大きくなっていったのである。

19世紀半ばの書物生産に携わったイギリス人で、Medievalism と切っても切れない人物が、私見によれば3名いた。ヘンリー・ショー（1800—

73), オーウェン・ジョーンズ (1809—74), ヘンリー・ノエル・ハンフリーズ (1810—79) の3人で、彼らはだいたい同時期に活躍し、互いに協力しあう関係にもあった。彼らに共通するのは、専門家以上の知識と技術をもって、中世の装飾写本や建築物に多大の関心を示し、またカラー図版による複製を出版する際、図案作成者としてデザインを手掛けたり、ジョーンズとハンフリーズに至っては中世風の装丁デザインにも才能を発揮したという点である。近代の中世文学や歴史の文献学的研究が、出版を目的としたクラブやソサイエティという団体の主導で行われたことは知られているが、こういった本文校訂版にはカラー図版はほとんど掲載されていない。この点からも、この3名の仕事は、テキストの出版とはいささか次元の異なる分野であったといえよう。

この3人は共通点もあったかわりに、それぞれ違う個性の持ち主でもあった。ルアーリ・マクリーンも指摘するように、ヘンリー・ショーは本質的に学者であり、好古家 *antiquary* であった。どんな出版物においても、彼は過去の芸術を正確に再現しようと努力したのである。一方、オーウェン・ジョーンズはデザイナーであり、教師でもあったために、過去の芸術を学問的に現代の装飾に活用することに心を砕いていた。彼が1851年の大博覧会やクリスタル・パレスのデザインに実力を発揮したことはよく知られている。ヘンリー・ノエル・ハンフリーズは、イタリアで学んだ装飾写本の魅力を吸収するすぐれた才能の持ち主で、写本を単にコピーするのではなく、活力と豊かさをもつ現代的な写本を再創造したのであった。

それでは一人ずつ1850年頃に至るまでの足跡をたどってみよう。ここで1850年を区切りの年として選んだのは、1830年、1840年代の中世趣味が、書物生産の形態にとって一つの頂点を迎えたと考えられるからである。ヘンリー・ショーは素晴らしい技術を用いて、中世およびエリザベス時代の美術、建築、そして装飾写本に関するさまざまな要素を書物の中で再現するのに、その一生を捧げた。言葉とイメージの合体を目指して実践した点で、ウィリアム・ブレイクやジョン・ラスキンと肩を並べる人物ともいえよう。ショーは、ゴシック建築の細部に関する図版集などを出版した後、

1833年にフレデリック・マッデンと共同で『装飾用例集』 *Illuminated Ornaments Selected from Manuscripts and Early Printed Books from the Sixth to the Seventeenth Centuries* を出版した。印刷はチジック・プレスのチャールズ・ウィティンガム、出版はウィリアム・ピカリングという組み合わせで、ショーとこの両者の関係はその後長く続くことになった。実はこの書物、1830年から毎月一度、5枚一組の図版で、色なし、手彩色、そして金を用いた大型限定版という、相異なる3種類のパターンで発行された。ちなみに、1836年に発行されたディケンズの小説『ピクウィック・ペイパーズ』の月間分冊は、それぞれ4枚の色なし図版を含めて定価が僅か1シリングであったが、ショーの最も高価な限定版の分冊はなんと15シリングもしたのである。

この書物は19世紀になって専門家のみならず、一般読者向けとしても出版された装飾写本の研究書としては最初のものである。それゆえ本書は、写本美術の素晴らしさとその歴史的価値を一般人に知らしめたという点でも、またヴィクトリア時代に彩色した書物の流行を呼び起こしたという点でも、重要な出版物であった。ショーは図版のデザインとエッチングを担当した。図版解説を書いたマッデンは、大英博物館の写本室に勤務する若い図書館員だったが、その後1839年に『サー・ガウエイン』、1847年には『ラヤモンのブルート』といった中世英文学の校訂版を出版する大学者に成長したことは、周知のとおりである。当然のことながら、本書の図版解説は今日でも通用するすぐれたものである。ショーとマッデンという優れた研究者の組み合わせによって実現した本書では、一般的な解説の後に写本からの実例の手彩色図版とその解説が時代別にアレンジされており、この形式はその後に見られる同種の出版物の模範となった。ただ一つの難点は、写本の選択が時代的に偏っていることで、40枚の図版のうち半分以上の22枚が15世紀から採用されている。19世紀前半のこの時期にはまだ多色石版印刷 *chromolithography* が一般化されておらず、手で彩色するのが普通であったが、それだからこそ本書は手彩色によるもっともレベルの高い図版を生み出したのである。ショーは多色石版印刷を用いたジョーンズやハンフ

(192)

リーズよりほぼ10才年上であった。科学技術が急速に進歩するこの時代にあっては、10才違いというのは重要で、選択する技法に違いが出たとしても驚くべきことではなかった。

1832年、出版者ピカリングは手彩色図版による『古代の家具の用例集』*Specimens of Ancient Furniture drawn from Existing Authorities* を、やはり分冊で出版し始めた。1836年に最終的な書物の形となった本書の制作にあたっては、図版デザインとエッチングをヘンリー・ショー、図版解説をサー・サミュエル・ラッシュ・メイリックが担当するという組み合わせである。弁護士メイリックはロンドン塔やウィンザー城の鎧兜のコレクションの整理を行ったり、また1824年には大著『古代甲冑の批判的研究』を公にした好古学者であった。当然ながらこの『古代の家具の用例集』の解説にもうってつけの著者であった。

本書は貴族の館や教会などに残っていた中世とエリザベス時代の家具、調度品、装飾品の数々の実例を集めたもので、昔の様子を知る貴重な資料となっている。ラファエル前派同志団と親しかった画家フォード・マドックス・ブラウンは、1848年に絵画『擁護者ジョン・オブ・ゴントに新訳聖書の自らの翻訳を読み上げるウィクリフ』を完成したが、ブラウンはこの中で、ウィクリフの隣に置かれた書見台を描くにあたって、『古代の家具の用例集』にある二つの図版からコピーした。この書見台は、実際にケント州のデルトリング教会にあって、14世紀半ばに作られたものである。

ショーの作として有名な『中世の衣装と装飾品』*Dresses and Decorations of the Middle Ages* も1840年から分冊で出版され、最終的に1843年に2巻本としてまとめられた。全部で94枚の図版からなり、7世紀から17世紀に至る絵画、ミニアチュール、ステンド・グラス、装飾品、ガラス製品、長持ち、衣装、金杯、宝飾品などが、手彩色の銅版画と木版の多色印刷による装飾を施されている。マクリーンは本書の出来ばえを、19世紀に生み出された最も美しい書物と折り紙を付けたほどである。それゆえブラウンやロセッティなど、同時代の画家たちが中世的な主題で描くとき本書を重要なソースとして用いたのはむしろ当然のことだった。一例を挙げ

れば、ロセッティは1851年から9年間かけて描いたドローイングと油彩、『彼らはいかに巡り会いしか』において、中世の衣装をまとった互いに瓜二つの二組の男女が暗い森で出会い、そのうちの一人の女性が衝撃のあまり失心する場面を描いている。ここに登場する二人の女性のヘッドドレスは、『中世の衣装と装飾品』に再現された写本のミニチュールから採用されたものである。

ヘンリー・ショーは1845年に『中世のアルファベット、数字、そして意匠』*Alphabets, Numerals, and Devices of the Middle Ages* を出版したが、これはその後続いて60種類も現れる、中世レタリングのガイドブックのパイオニアとなった。本書は、当時流行していたゴシック・リバイバルの建築家やデザイナーに中世の書体について正しく伝えたいとするショー自身の意図どおり、彼らに大いに歓迎されたのである。

ヘンリー・ショーの中世関係の出版物は他にも多くあり、出版されずに終わった中世写本のファクシミリ原稿がヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に収められているが、次にオーウェン・ジョーンズの仕事に移ろう。

18世紀末にババリアで発見、開発された石版刷の技術 lithography は、印刷画が平坦であることが特徴で、19世紀前半のイギリスではこれを多色刷にする様々な試みが繰り返されていた。オーウェン・ジョーンズは、スペインのアルハンブラ宮殿に滞在して描いたドローイングをもとに、1842年から45年にかけて『アルハンブラ』2巻本を出版した。もちろん初めは分冊で発行されたものだが、縦65cm、横49cmという大冊で、中世スペインの風情を多色石版刷で示した学術的な著作であった。2巻で36ポンド10シリングもするこの出版物の印刷経費を捻出するために、ジョーンズは父の遺してくれた土地を売却せざるを得ないほどであった。

同じころジョーンズは、美術の才能と印刷への興味を挿絵入りのプレゼント用書籍 gift books の制作にも投入している。スコットの伝記作家で娘婿だったジョン・G・ロックハートは、1823年に『古いスペインのパラッド集』*Ancient Spanish Ballads* を完成したが、1841年にロンドンの



出版社ジョン・マリーがこれをギフト・ブックとして出版することを企画した。マクレーンがロンドンで出版されたギフト・ブックの中でもっともカラフルで豪華な印刷物と評価した本書では、ジョンズが多色石版刷によるアラビア風のタイトル・ページ4枚のデザインと印刷を手掛けたのをはじめ、木版のボーダー・デコレーション、飾り文字、ヴィニェットを描いた。その上、多くの画家が参加してたくさんの挿絵を描き、豪華な書物となったのである。初版は1025部、挿絵に若干の変更を加えた1842年の再版では2000部が印刷されて、よく売れた。『アルハンブラ』と『古いスペインのバラッド集』の出版が、ムーア人文化やオリエンタル風の雰囲気に対する興味をかきたてた結果、イギリスでは一種の東洋趣味が流行したほどであった。

今まで述べてきた出版物を含めて、カラーや金をふんだんに用いて装飾を施した書物 *illuminated book* は、研究者向きに作られていたとしても、本質的にギフト・ブックの性格をもっていた。19世紀前半の *illuminated book* の内容としては、中世写本の実例の復刻の外、聖書や祈禱書の類が多く、中世写本に似せたデザインと、手書きや印刷を問わず中世写本のゴシック書体が採用されたことは、中世趣味を如実に表すものといえる。

オーウェン・ジョンズは1841年から66年にかけて、聖書から抜粋したテキストを *illuminated books* として多く出版した。そのうち1849年の *The Preacher* は『伝道の書』について、中世写本のように手書きしたものを多色石版刷で印刷したのであった。その印刷面といい製本といい、手作りのように見せて、実は精巧な工業技術の成果を誇っている点で、この時代の中世趣味をもっとも強く印象づける書物だといえよう。とりわけ、本書の製本は、外見上は木の板にゴシック・デザインを手で彫刻したようにみえるが、実際には柔らかい板の表面にスチーム・エンジンの圧力を利用して、熱したスタンプを押し付けてできるデザインを用いたもので、他にほとんど例をみない製本技術であった。この装丁デザインも中世写本の装丁や後期ゴシック様式の教会建築の装飾に似せたものである。この書物を手にしたヴィクトリア時代の読者は、大きく変化する社会と時代にお

いて、歴史、彫刻、絵画、そして宗教が一体となってここに存在するトータルな意味を意識したことであろう。

同じ1849年、ジョーンズは旧訳聖書の『雅歌』*The Song of Songs* を製作した。7色も用いた多色石版刷の本書には、革に装飾パターンを浅いリレーフ状に押しつけて得られるレリーヴォ製本 *Relievo binding* が用いられた。この装丁の方法も1850年前後に12例のみが存在しただけで、その殆どがジョーンズの装丁デザインによるものである。エレナー・ジェイミソンによれば、レリーヴォ製本が可能になったのは、改良の結果1832年にインペリアル・アーミング・プレスという製本プレスが生まれたためであった。

これまた1849年には、ジョーンズとノエル・ハンフリーズは協力してフォリオ版の大作『中世の装飾本』*The Illuminated Books of the Middle Ages* を作り上げた。中世写本の装飾ページをジョーンズの手による多色石版刷で再現し、ハンフリーズが図版の解説を施したものである。有名なリンディスファーン聖書の一葉も含まれているが、ここでは『ダラムの書』と呼ばれている。

ここで最後のハンフリーズの仕事について考察してみよう。*Dictionary of National Biography* でヘンリー・ノエル・ハンフリーズの項を調べると、彼の職業は *artist, naturalist, numismatist* となっている。確かにハンフリーズは蝶類、野生の花、貨幣やメダルについて、カラー図版入りの書物を多く出版している。しかしやはり彼の本領は、若い頃にイタリアで学んだ装飾写本をもとにした中世的なデザインの聖書、装飾写本の複製など、中世趣味の色濃い分野であった。1844年の、写本からとった『フロワサールの装飾図版』*Illuminated Illustrations of Froissart* は、ロセッティの絵画に影響を与えた書物であったが、手彩色のリトグラフの出来はその後の彼の出版物に比べると今一つという感が強い。

1847年に出版された『我らが主の説教』*Parables of Our Lord* は31ページの小冊子で、綿密に仕上げられた多色石版刷による印刷物である。終わりに付けられたページには装飾ボーダーの象徴に関する解説があり、そ

(196)

の準備に当たってはハンフリーズが過去の写本装飾にいっさい依存することなく、すべて本文の内容と一致するようなデザインを新たに考え出したと、自分の方法について述べている。この「目的に合わせて」デザインするやり方は、先に述べたショーやジョーンズとは異なる理論で、1840年代に出版されたハンフリーズの著作にずっと現れている。この書物の場合、製本もいわゆる「パピエ・マシェ」製本 Papier-mâché binding というきわめてユニークな方法で準備されている。これは紙を砕いて糊と混ぜあわせたパピエ・マシェを黒の漆喰の型に入れて、金属で強固にするもので、結果はきわめて中世的な感じを与える。一見すると黒檀を彫刻したようなこの書物は、書棚に並べることはできず、テーブルやピアノの上におくことになる。本書の製本カバーの四隅には、キリストの説教を記録した4人の福音書家マタイ、マルコ、ヨハネ、ルカをそれぞれ象徴する天使、ライオン、鷲、牡牛の頭部がみられる。中央には種蒔く人の姿と、Scripture parables という言葉がみえる。

1848年、ハンフリーズは『我が主の奇跡』*The Miracles of Our Lord* を出版した。新約聖書に記録されたキリストの12の奇跡を装飾ページの中で扱ったもので、ハンフリーズによるパピエ・マシェ製本のカバーには、そのうち6つの奇跡を描いたデザインがみられる。この製本は大英博物館にあって12世紀前半に作られた Psalter of Queen Melisende の象牙による製本デザインに基づくといわれている。この写本は Queen Melisende が君臨したエルサレムで、ビザンチン文化の影響のもとに製作されたロマネスク写本で、この近東地域のデザインの影響は、ハンフリーズだけではなく、ジョーンズにも影響を与えた。水がワインとなった奇跡を描くページでは、聖パウロが書物と剣をもって描かれている。ハンフリーズは、本書の終わりにつけた装飾に関する解説において、キリスト教の象徴性への関心を明らかにしている。また、この種の芸術を扱う正当性を主張する手だてとして、トマス・アーノルド博士がローマの初期キリスト教会のフレスコ絵画がもつ教育的価値を称賛したことを引用している。これはハンフリーズがローマン・カトリックではないかとの疑いから逃れるために、英

国教会の司祭でラグビー校の校長でもあった有名人、アーノルド博士の言葉を持ち出したのだと考えられる。

この点については次のような事情を説明する必要があるだろう。19世紀前半のイギリスでは宗教がらみの深刻な問題が起こっていた。それまでカトリック教徒は長い間さまざまな弾圧を受けていたが、1840年のカトリック解放令によって宗教、政治の面で自由を獲得した。ところが、1840年ごろには、若きアイルランド運動と呼ばれる急進グループなどがアイルランドにおける自治権の確立を主張して行動を起こしたため、多くのイングランド人は、ローマン・カトリックやそれに類するものを恐れるようになったのである。一方イギリス国内でも、英国国教会の腐敗を糾弾し、カトリックに近い古い祭儀の復活を主張する高教会派のオクスフォード運動が、地方的な運動から全国に波及していった。こういった情勢の時代に、建築のゴシック・リバイバルの波に乗って、中世の教会建築や写本に装飾的なパターンを求めようとする芸術家は、常にカトリックと見られがちであった。とりわけ、カトリックに改宗した建築家のオーガスタス・ウェルビー・ノースモア・ピュージンのように、ゴシック芸術の論理的帰結はカトリックへの改宗だと広言してはばからない人物が現れるに及んで、英国国教会に所属する芸術家の立場は微妙なものとなったのである。1848年に結成されたラファエル前派同志団の画家たちも、初めのころは聖書に題材を得た絵画に象徴性を込めたため、PRB という秘密結社めいたイニシアルも手伝って、うさん臭く思われたのも無理はなかったのである。

さて『我が主の説教』と『我が主の奇跡』のデザインに顕著に見られる傾向は、ハンフリーズが見開き2ページの装飾の美しさを主張したことである。この点では、後のケルムスコット・プレスを設立して、理想的な書物の美を中世書物の見開きページの美しさに求めて実践したウィリアム・モリスの考えを先取りしていたと言えるかも知れない。

翌1849年、ハンフリーズは『ブラック・プリンスの記録』*A Record of The Black Prince* をやはりパピエ・マシェ製本で出版した。これは彼が5年前にフローラルを出版した経験から、そこに扱われたブラック・プリ

(198)

ンスについての記述を中心に、多くの年代記からも集めて一冊にまとめたもので、本文の印刷にはゴシック体活字を用いた。パピエ・マシェ製本のデザインはカンタベリーにあるブラック・プリンスの墓からヒントを得て作られている。

1850年以降にハンフリーズが出版したパピエ・マシェ製本の例としては、1850年に出版された『書体の起源と発達』*The Origin and Progress of the Art of Writing* がある。19世紀には書きとめられた言語こそ文明を表すものとする思想があり、本書も古い書体の研究が文化の歴史と進歩を示すことを念頭において書かれている。ハンフリーズは序文において本書執筆の目的を、当時発見されたアッシリア帝国の歴史文書を紹介するためとしているが、同時に世界各地の多くの書体に触れている。興味深いことに、ラファエル前派同志団のウィリアム・ホルマン・ハントは1854年に王立美術院に出展した『目覚める良心』のなかに、本書を描き入れた。ジョン・ラスキンが指摘したように、ここに描かれた家具調度品はその時代の流行の最先端をいく真新しいものであった。テーブルの上におかれた『書体の起源と発達』も、ここでは中世趣味を表すというより、絵画が画かれた時期を典型的に表す象徴として用いられたと考えられよう。ちなみにパピエ・マシェ製本は1843年に始まってちょうど20年間にわたって21例が確認されているが、そのうち半分の10例がハンフリーズのデザインによるものであった。

こうして見てくると、1840年代、50年代に書物生産における中世趣味が一つの頂点に達したことがわかる。中世の装飾写本や聖書をカラーで読者に届けようとしたこと、またレリーヴォ製本、パピエ・マシェ製本など中世写本の製本を模したことが、この時期のはっきりした特徴といえる。この動きを推進したのは、ショー、ジョーンズ、ハンフリーズといった中世趣味をもつ芸術家たちであった。しかし同時に忘れてならないのは、中世時代には一冊ずつ手で写し、一冊ずつ手で製本していた書物が、蒸気機関のおかげで、総て機械で大量生産できるようになったことである。前にも述べたように、Medievalism が産業革命と機械主義の行き過ぎへの不安

と抵抗から、人間性を取り戻す運動として始まったにも拘わらず、逆に効率の良い工業技術が Medievalism の普及に力を貸す結果となったのは皮肉なことであった。

こうして、中世趣味はヴィクトリア社会に浸透していった。専門家にとっても、また一般人にとってもゴシック建築や、教会の装飾、そして多色刷りの書物など、視覚に直接訴える効果は絶大なものがあった。中世写本に見られる書体やアルファベットの教則本が60種類以上も出回ったり、またハンフリーズたちが出版した中世風の装飾写本 Missal Painting の書き方についての教則本がよく売れたことも注目に値いする。女性の職業としてこの分野の仕事が適当だと考えたラスキンは、この種の訓練を受けるよう勧めたほどであった。このようにして中世趣味が多くの方面に浸透していったのであった。

#### 参考文献

- Ball, Douglas. *Victorian Publishers' Bindings*, London: The Library Association, 1985.
- Beckwith, Alice H. R. H. *Victorian Bibliomania: The Illuminated Book in 19th-Century Britain*, Providence, R. I.: Museum of Art, Rhode Island School of Design, 1987.
- Clark, Kenneth. *The Gothic Revival: An Essay in the History of Taste*, 3rd ed., paperback, New York: Harper & Row, 1962.
- Franklin, Colin. *A Catalogue of Early Colour Printing from Chiaroscuro to Aquatint*, Culham, Oxford: Colin & Charlotte Franklin, 1977.
- Girouard, Mark. *The Return to Camelot: Chivalry and the English Gentleman*, London: Yale University Press, 1981.
- Jamieson, Eleanore. *English Embossed Bindings 1825-1850*, Cambridge Bibliographical Society Monograph No.7, Cambridge: Cambridge University Press, 1972.
- Keynes, Geoffrey. *William Pickering, Publisher: A Memoir and a Checklist of his Publications*, revised ed., London: The Galahad Press, 1969.
- McLean, Ruari. *Victorian Book Design and Colour Printing*, 2nd ed.,

London: Faber and Faber, 1972.

McLean, Ruari. *Victorian Publishers' Book-Bindings in Cloth and Leather*, London: Gordon Fraser, 1974.

Wakeman, Geoffrey. *Victorian Book Illustration: The Technical Revolution*, Newton Abbot: David & Charles, 1973.

高宮利行「中世趣味とラファエル前派第一世代」『三田文学』1993年春季号

谷田博幸「ヴィクトリア朝のブック・イラストレーション——ラファエル前派とモクソン版『テニソン詩集（1857）』」『早稲田大学図書館紀要』第27号（1987年）

付 本稿は1990年6月23日（土）鶴見大学で開催された日本中世英語英文学会東支部第6回研究発表会における口頭発表「19世紀イギリスの書物生産における Medievalism」（スライド付き）の原稿に加筆したものである。